

## ミンダナオ島にゴング音楽を求めて

寺田 吉孝 (てらだ よしたか)

本館民族文化研究部

次第にイスラム社会内の派閥間の争いにも転用され、戦いがいつどこで勃発するかを予測しにくくなつた。また、ここ数年は麻薬の栽培をおこなう武装集団が各地に出現して縄張り争いを展開しており、状況はより一層複雑になつてゐる。このために、村人が戦闘に巻き込まれのを避けるために村を去り、国内難民となつて離散した例も多い。クリンタング音楽は、村ごとに演目や演奏スタイルが少しずつ異なるが、これらの村が伝えられた音楽は、それを支える共同体がなくなつたために消滅寸前である。

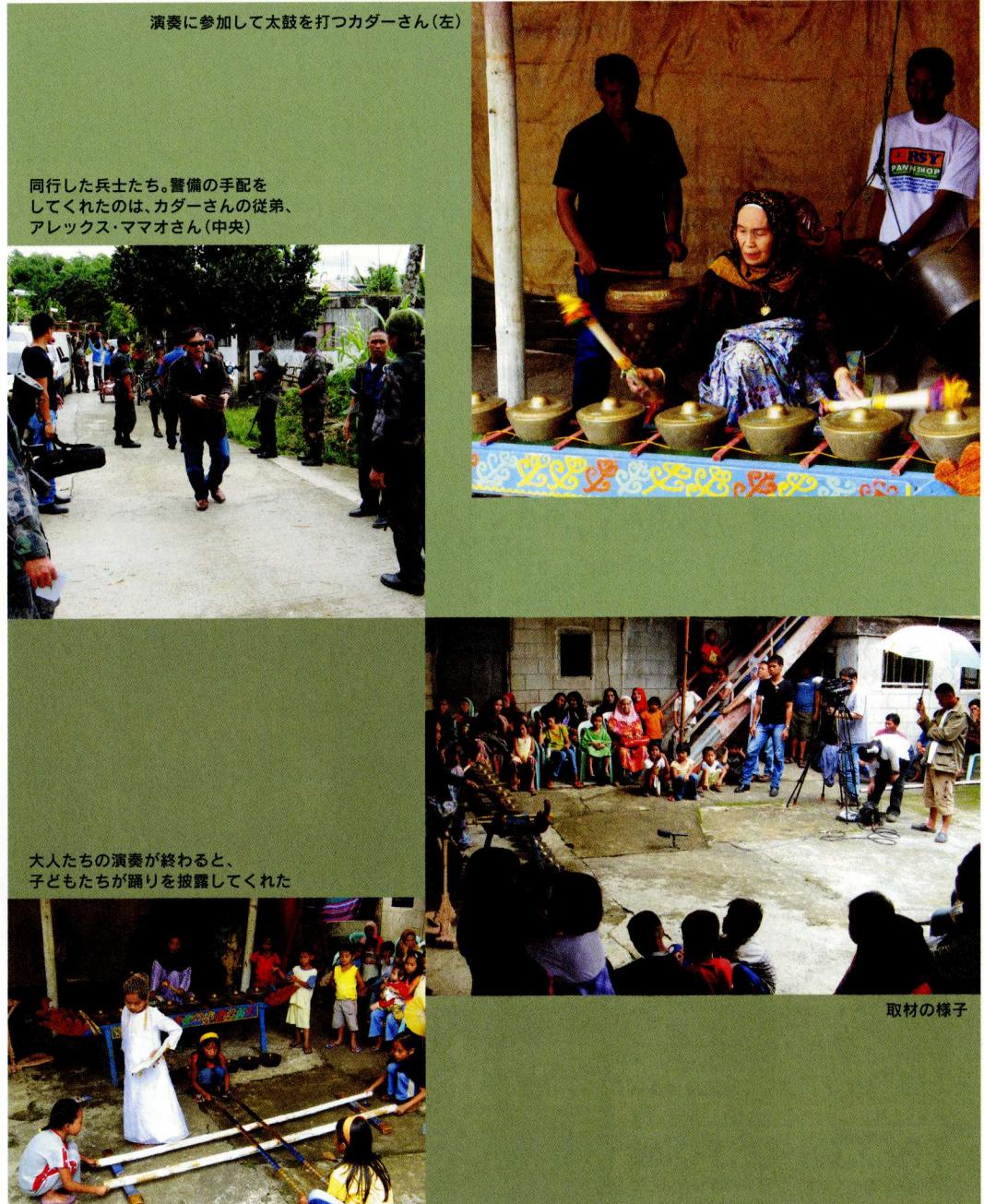
### ゴングの村、タラカへ

二〇〇八年三月にフィリピン・ミンダナオ島を訪れる機会に恵まれた。わたしは長年この島で演奏されるクリンタンとよばれるゴングの音楽を調べてきたが、人目に耐える映像資料がないため、いつか撮影のための取材をおこないたいと考えていた。クリンタンは、ミンダナオ島西部やスルー諸島に住むイスラム教徒たちによって伝承されてきたゴング音楽で、村落部を中心に、結婚式、割礼式をはじめさまざまな機会に演奏されている。

に演奏が始まっていた。そこにいた大勢の人びとは、わたしたちの取材のために久々の帰国を祝うために集まつていた。クリンタンは、もとより演奏で手と観客の境がなく、皆が順に演奏で生きる参加型の音楽なので、カダーさんも演奏に加わる。わたしも見ているだけでは許されず、少しでも聞いているだけでは許されず、少しだけ演奏することになった。実際に演奏を始めると音の力は圧倒的だ。少し離れて聞いているのとは大違いである。力を込めて打たないと、その強い流れに押し流されそうになる。しかし、一度音の流れに入りこめば後は身を任せただけだ。自分が撥(はさみ)をもつてゴングを打つているという意識は遠ざかり、体の感覚さえはつきりしない。音の洪水に包まれる快樂に浸つていたため、銃をもつた兵士たちに囲まれていることをしばらく忘れていた。

夜間に移動したり村にとどまることは危険であるため、取材の時間は自ずと短くなる。そのためわたしたちが今回記録した音楽は量的には限られているかもしれないが、この地域における取材の難しさや、近年の若者のクリンタン離れを考えると、資料の価値は時間が経つにつれて高まっていくだろう。しかしそれと一緒に、村人と音を共有した経験から、演技手と聞き手の音の体験には大きな差があることを再認識させられた。音の

クリンタンが演奏される地域は、一九七〇年代以降イスラム分離主義勢力が政府と対立して戦闘を繰り返してきた歴史をもつ。両者の和解への動きは一進一退であり、現在でも状況は流動的で不安定だ。分離主義勢力と政府軍との戦闘だけでなく、イスラム集団間の小競り合いや身代金目当ての誘拐事件が多発する危険な地域としても知られている。分離主義グループの支援のために、リビアやマレーシアなどから金銭だけでなく大量の武器が流入したことが、この地域全体の危険度を高めている。初めは政府軍に対抗するために用いられた武器が、



クリンタンが演奏される地域は、一九七〇年代以降イスラム分離主義勢力が政府と対立して戦闘を繰り返してきた歴史をもつ。両者の和解への動きは一進一退であり、現在でも状況は流動的で不安定だ。分離主義勢力と政府軍との戦闘だけでなく、イスラム集団間の小競り合いや身代金目当ての誘拐事件が多発する危険な地域としても知られている。分離主義グループの支援のために、リビアやマレーシアなどから金銭だけでなく大量の武器が流入したことが、この地域全体の危険度を高めている。初めは政府軍に対抗するために用いられた武器が、

ミンダナオ島を一律に危険だと決めつけるマニラっ子たちに与(よ)したくはないが、現地で調査をおこなうには注意が必要なのも事実である。今回の取材は、わたしのクリンタン音楽の師匠であり長年の盟友でもあるウソパイ・カダーさんと共にでおこなつた。取材班は、我々二人のほか、カダーさんの親族数名、日本から同行した撮影班二名で編成されたが、そのほかに護衛の兵士たちが一〇人ほど随行した。彼らはフィリピン国家警察に所属する現役の兵士や特殊部隊の隊員である。迷彩服に身を包んだ臨戦体制の兵士はもちろんのこと、三人の私服警官や同行したカダーさんの親戚の

男性たちも全員が銃を携えていた。警護が多いと目立つので余計に攻撃的にならないか。このような警護が必要な地域で本当に音楽が演奏されているのだろうか。演奏されているとしても取材が可能だろうか。

そのような不安が頭をよぎるが、「十分な根回しと警護があれば大丈夫」というカダーさんたちのこゝに後押しされて車三台に分乗して現地に向かつた。今回の取材のハイライトは、マラナオ人が多く住む南ラナオ県の中心都市マラウイから車で一時間半ほど南に下ったタラカ村である。タラカはカダーさんが生まれ育つた村で、今でも彼の一〇〇歳になる父親を筆頭に一族が住んでいる。クリンタンが盛んなことで知られ、伝統的な奏法をうけつぐ年配の奏者が多く住んでいるため是非とも取材したい村だった。しかし、タラカ周辺は今回の調査地のなかでもっとも危ない地域らしい。冗談を言い合つて明るく振舞つていた兵士たちの目つきが、この村に近づくにつれて次第に険しくなつていくのに気がつく。また村に入る直前のチェックポイントで応援の兵士が五人ほど合流した。

### 音の洪水

村に着くとカダー家の前庭ではす

れた人たちへの感謝の意をこめて、現地で上映会を開くつもりである。そのときには、護衛についてくれた兵士たちが、

銃をもたずに番組を観ることができるようになつていてることを祈りたい。